

木蓮の声なら判る気もすなり

藤田湘子

遺句集『てんてん』所収。平成十七年の作。掲句の直前に「虻数分にこにことわが傍にゐし」の句があり、共に心に沁み入る句で忘れ難い。

木蓮の声なら判る気がするということは、身のまわりには判り得ない声が多いということか。にこにこと数分間傍にいてくれる虻に心を動かされた作者がいるということとは、そんな人が傍にいないことの裏返しであろうか。先生の孤独なたましいの声が聞こえるようだ。

誰もが通る老病の寂しさかもしれないが、「鷹」の行末を案じる主宰の孤独と憂いも感じられて、動植物との交感の方が人間界よりも容易かったかもしれない最晩年の湘子を思った。

2005年（h17作）第十一句集『てんてん』 鑑賞・野本京